

留学報告書
～人生で一番のチャレンジ～

マキーワン大学
外国語学部（中期）

わずか半年前の私にとって、親元を離れること、海外に行くこと、3日以上家から離れて生活することでさえ初めての経験でした。小学生の頃から英会話スクールに通っており、海外生活や海外の学校に通うことは一つの夢でした。実際に留学という選択を意識し始めたのは中学を卒業するあたりの頃でしたが、いざその大きな挑戦を目の前にした時の足がすくむような気持ちとコロナ禍も相まって、挑戦を諦めていた時期が何度かありました。そして大学に入学し、英米語学科を専攻していたことで英語に対する気持ちが徐々に大きくなり、留学をしたいという気持ちが昔よりも鮮明になりました。私はそれを実現させるために足りていない語学力を補い、夢であった留学を何とかつかみ取ることができました。

出国日が近づくにつれて、現実味が帯びてきて不安が押し寄せました。しかし、自分が決めたことだと言い聞かせ、後悔をしないためにポジティブに考えながら当日を迎えました。当然親との別れは悲しく、寂しいものでしたが、自分のためにも応援してくれている人のためにも頑張ろうという気持ちで何とか出発しました。留学には仲間も一緒だったため、様々な感情を紛らわすことができました。そして長い待ち時間の末、成田空港から日本を発航する際に早くも海外の雰囲気を感じました。カナダに向かう飛行機であるため、外国人の乗客ばかりになり日本語話者がわずかになるのは当たり前のことですが、心配性の私はそこですでに不安でいっぱいになりました。そしてそれを境に初めてづくしの環境に変わりました。授業でしか見たことのなかった英語での機内食案内や、機長のアナウンス、周りから聞こえてくる英語などは15%ほどしか理解できませんでした。

初の海外上陸を済ませ、検疫や税関もなんとか突破しました。2度目の乗り継ぎも済ませ、4か月間お世話になるエドモントンに到着しました。寮までの移動は荷物が多かったため一人でタクシーに乗ることになりました。一対一なので恥をかいても良いと思い、今までの授業を必死に思い出し、無言だった運転手に思い切って話しかけました。いざ会話をしてみると意外と伝わって楽しさが徐々に湧きました。15分ほどで寮に到着すると勝手に思っていたのですが、いつまで経っても着かず、結果的に50分近く乗っていましたが、その間ずっと日本の車などについて話していました。自分の得意分野だったため会話が弾みそこで少し自信ができました。タクシーを降り寮のチェックインを済ませ部屋に入ると、まだルームメイトは到着しておらず、静かな部屋で荷物を整理しながら過ごしました。現地時間は午後8時を過ぎていたにも関わらず外は明るく仲間と周辺を散策しました。時差ボケがあったとはいえ、20時間近く寝れていなかったため午後11頃に寝まし

た。すると明け方の4時頃に部屋のドアが開きルームメイトが到着しました。長旅で相手も疲れていたため軽く自己紹介をして、就寝しました。次の日の昼頃に改めて会話をし、連絡先も交換しました。ルームメイトとの相性は運次第とよく言われますが、私のルームメイトはとても優しく、穏やかな人でした。4か月間を共に過ごす中で親しくなり、最終的にはお互いの家族が交流するほどの仲になりました。毎日を共に過ごすルームメイトが彼だったことは、私の留学生活において大きな安心材料となりました。1週間ほどで生活に慣れていく一方で徐々にホームシックになっていきました。仲間や環境にも恵まれているにもかかわらず、ふと思い出すと弱気になってしまい、強くいようとすればするほどホームシックが襲ってきました。しかし、ルームメイトと話をしたり外出したりしている間は、その不安を忘れて過ごすことができました。それ以来、一人でいる時間や部屋にいる時間をなるべく減らすよう努力をしました。最終的にその行動は語学力の向上にも繋がったと考えています。

そして、やっと大学生活が開始しました。初日のオリエンテーションは過去に日本に留学をしていた仲間がたくさんサポートをしてくれました。夜には留学生全員でレストランに行き、距離を縮めることができました。初めての授業では様々な人種、宗教、文化を持ったクラスメイトに出会いました。授業内のグループワークや休み時間などを通じて話す機会が何度もあり、仲間を作ることができました。先生を含め、驚くほど皆さんが親切で、留学生である私たちを温かく迎え入れ、家族のように接してくださいました。日本での初対面の人との会話では年齢を聞くことも多いですが、現地では友人に年齢を聞かれることはほぼなく、しばらく時間がたった後に年齢を知って驚くことも多々ありました。ただ私にとって、そういった事を気にも留めず楽しく交流をすることというのはカルチャーショックでもあり、理想の価値観でもありました。4か月間の留学を通じて、そのような経験を何度もしました。日本での生活は周りの目を気にしてしまったり、周りに合わせて行動をすることも少なくないため、そのギャップを直に感じました。私のルームメイトも8歳年上でしたが、休日に一緒に出掛けたり部屋で一緒に食事をしたりと、年下や年上としての友達ではなく一人の友人として過ごしました。海外生活の魅力を感じる毎日の一方で、日本の良さに気づくこともたくさんありました。授業後の日本語クラブでは日本の文化や語学に興味を持っている人が集まり、普段は感じていなかった、日本の美しい街並みや歴史的側面、食文化など誇りを強く感じる機会にもなりました。

このように留学生活では一日一日が非常に充実していたため、毎日があつという間に過ぎていきました。最初の頃は帰れるなら帰りたいたいと思っていた時期もありましたが、最後の月には一日でも長くこの生活を続けたいと思うほど、留学が終わってしまうことをさみしく感じるようになっていました。やっと深まってきた仲間との関係性や好きだった生活を離れることはとても辛く、出国前夜には一人で涙を流しました。その一方で、もっとレ

ベルアップしていつか戻って来たいという気持ちも強く芽生えました。学んできた数えきれないものをこれからの自分に言い聞かせながら、また成長した姿で仲間と再び会いたいと感じました。この私にとっての人生で一番のチャレンジは何にも変えようがない、かげがえのないものとなりました。

